



ビロードの朝焼けを越えて

『ビロードの朝焼けを越えて』 目次

「豊穰の月」	栖道 明	5 頁
「ぬかどこ賛歌」	緒形ステ実	2 0 頁
「小休止 或る鯨のとんだ話」	緒形ステ実	4 2 頁
「星塵」	栖道 明	5 1 頁

後書き

6 3 頁

豊穰の月

栖道 明

泣きたくないと決まって行く場所があった。店の裏手の公園にある大きな桜の木。枝の間には赤い屋根の小鳥小屋が備え付けられていて、春になると新しい生命が誕生する。

ヨウコのお気に入りの場所だ。

私が私に戻る場所。私が息を吹き返す場所。そして大切な友人がいる場所でもある。

「アンジー、いるの？」

夕暮れ時。太陽は姿を隠しつつあり、影法師が伸びている。

ヨウコはトレーを片手に木に近づく。

「アンジー？」

アンジーとはここいらを縄張りにはしている黒猫のことだ。飼い猫ではない野良なのだが、時折ふらりとやってきてはご飯をせがみに来る。大体この時間にいることが多いのだけれど。ヨウコは幹に片手をかけて、木の裏を覗き込んだ。

「……え？」

そこにいたのはアンジーではなく、一人の男だった。幹に背を預けて眠っている。黒いタートルネックにジーンズ、カーキのミリタリーコート。

「あ、わ、」

動揺して根っこに躓いた。だって、まさか人がいるなんて思わないだろう。持っていたトレーが地面にひっくり返り、キャットフードが散らばった。

男の肩がびくりと動く。

やばい。自分で言うのもなんだがこれでも一応、若い女だ。とりあえずこの場を離れようと背を向ける。

が。

それを引き留めるかのように横から伸びてきた男の手がヨウコのエプロンの端を掴んだ。

ひっと息が詰まる。ヨウコは不覚にも固まって、エプロンを掴む腕をただ視界に収めるしかできなかった。

男の顔がゆらりと上がり、こちらに向いた。

(…あ。瞳の色が)

違う。

男は吃驚するほど綺麗な顔立ちをしていた。色素の違う瞳はもちろん、整った鼻筋に薄い唇、寝癖なのか髪はぼさぼさだったがそれすらも男の魅力を損なっていない。

一つ確かなのは、この町の間人ではないことだ。人口の少ないこの町では誰もが顔見知りである。

男は寝ぼけ眼でこちらを見て、ヨウコはエプロンを掴む手を振り払うこともできず、男から目を逸らすこともできず硬直していた。

男の口が開く。ヨウコはごくりと喉を鳴らした。

「お腹が、空きました…」

「はああ？」

それがこの不思議な男とヨウコが出会った瞬間だった。

ぬかどこ賛歌

緒形ステ実

恋も、仕事も、ガラクタになってしまったものは何もかも、高いビルとビルとの間にこっそりと捨ててきて、私は発車間際のワンマン列車に飛び乗った。

「お客さん、閉めて閉めて」車掌さんの声にはっと顔を上げ、何もマイクで言うことないじゃない、と、視界の端でぐっすり眠るたったひとりの男の子を横目にボタンを押した。息が苦しい。ドアが閉まった。私は指先の受けた感覚に首をひねった。座席にもたれて深呼吸をしていると、体重から解放された足の裏が痛み始めた。ここでさっきの違和感の原因がわかって、なるほど、それでボタンの位置が記憶よりずっと低かったのかと納得がいった。

カードで思い切って買ったロイヤルブルーのピンヒール、どうしてもゴミになりきれなかったこれはやっぱり履いてくるべきじゃなかったのだ。

発車ベルに急かされた列車はゆっくりと重い腰を上げた。揺れに身を任せた私はしたたかに頭を打ち付けた。

あいたた、と小さく声を上げながら辺りを見回した。滑らかに流れる景色はどこまでも緑、緑。ときどき茶色。おおかたは柵田。人の代わりに走るのは薄灰の軽トラ。まるで車両ごとあのふるめかしい番組『小さな旅』に放り込まれてしまったみたいで、私はその大画面を無心に見つめていた。

ひとつふたつと静かに駅が過ぎて行った。そのよっつ目で立ち上がり、運賃箱の手前でふと、ありがとうございます、と言っていたことを思い出して口をもごもご動かし。けれど急に上手く挨拶が出てくるはずもなく、運賃と切符を投げ入れると怪訝そうな車掌さんの視線を引きちぎるようにして波打つホームに降り立った。

太陽に手をかざす。熱くなりそうな頭を、青くて濃いひとすじの谷風が撫でていく。

ふるさとに、私は帰ってきた。

小休止

或る鯨のとんだ話

緒形ステ実

「で、それでなんてコクったんだよ」

好奇心に満ちた六個の瞳が見つめてくる。俺は咳払いをする。

「『君が欲しいんだ』って」

すると教室内は一気に盛り上がり、机に座っていた西田が鼻をつまむ仕草をしながら声を上げる。

「くっせえ、臭いな！ 誰かそのゴミ箱の蓋持ってこいよ」

「ちょ、おい」

「臭いモンには蓋っていうだろ」

「やめろって！ うわっ」

俺は西田がじゃれついてくるのをかわして他の机に寄りかかった。椅子の背を前にして座っていた萩原は肘をついて遠い目をしている。

「いいよなあ、俺も、欲しい。欲しいって言ってみたい」

「決め顔する前に髪生やせよハゲワラ」

「野球部の宿命だ！」

そう言って拳を振り回す。でもさ、と、それまでずっと黙っていた岩崎が不意に顔を上げた。

「今まであんまり接点なかったよな、お前と小嶋さん。どうやってそこまで漕ぎ着けたんだ？」

「あっ、そうだそうだ。俺にも教えて」

「コツとかあんなら教えろよ、天野。いま一年に超可愛い子がいてさあ」

「バツカだなあ、にしーみたいな瓶底眼鏡なんか相手にしてくんないって」

「だからこそそのコツだろオ」

しかし俺は曖昧に笑う。みんなに肩を小突かれて、髪をもみくちやにされて、なぜか明日の放課後五丁目の角のたこ焼き屋で明石焼を二舟もおごる羽目になったって、曖昧に終わらせる。

コツがあるなら俺が知りたい。でも生まれつきの能力なんかどうやったって説明できっこないし信じてもらえないことも目に見えている。

だから俺は笑顔がとにかく上手くなってしまったのだった。

星塵

栖道 明

白と淡い青と銀色の光が水の中を交互に流れて行く。
大きな河の中を小舟に乗って揺蕩っていた。手を伸ばして水に触れるとほんのり暖かい水が指の隙間を通り抜けていく。
俺は何もこわくない世界にいた。
このままここにいてもいいかなと思えるくらい。

柔らかい風が吹いていた。

白いレースのカーテンが風に揺れている。白い天井、白いベッド。消毒液の匂い。いつもの病室だ。

「起きたかい？」

個室に自分以外の声が響いて俺は顔を傾けた。何度か瞬きをして目が光によやく慣れてくると、臍げだった相手の輪郭がくっきりと形作られていく。

脇に座っていたのは見知らぬ男だった。頭からつま先までざっと眺める。黒いタートルネックに濃紺のジーンズ。左耳にオニキスのピアス。

「だれ」

男は手に持っていた本をパタンと閉じた。本の題名は『星の王子様』。あの泣き虫の王子が主人公の本だ。

俺の訝しむ視線をものともせず男は薄い唇を開いた。

「僕は、七星」

「ななほし？ じゃあ苗字は北斗か？」

男はゆるりと目を細めた。

「ふふ、君は変わらないね」